書評

佐藤弘夫著
『偽書の精神史――神仏・異界と交感する中世』
（講談社・二〇〇二年）

三橋　正

一　はじめに

佐藤弘夫氏は日本中世思想史を専門とし、特に鎌倉新仏教や神仏習合などの宗教思想について業績を重ねている研究者である。氏は『日本中世の国家と仏教』（吉川弘文館、一九八七年）で日本中世における国家と仏教の関係を論じ、主著『神・仏・王権の中世』（法蔵館、一九九八年）では顕密仏教と新仏教のみならず神国思想などをも取り上げ、日本中世の宗教界全体を視野に入れた論を展開している（本誌第三一号に佐藤眞人氏による書評がある）。また、『鎌倉仏教』（レグルス文庫、一九九四年）や『アマテラスの変貌――中世神仏交渉史の視座』（法蔵館、二〇〇〇年）など、一般読者を対象とした著書の執筆にも精力的に取り組んでいる。本書も講談社選書メチエの一冊として刊行されたもので、学術書というよりは啓蒙書としての性格が強く、本誌の書評に取り上げるべきか躊躇したが、編集部からの依頼でもあり、また本書の主題である「偽書」は思想史研究にとって非常に重要な課題であり、研究方法についての議論を深めるべきであるとの立場から、敢えて筆を執ることにした。

二　本書の概要

先ず、本書の構成を示し、内容を概観しておきたい。

序　章　偽書の精神史へ
第一章　新仏教と本覚思想のあいだ
　1　本覚思想と日蓮遺文
　2　法華唱題の根拠

3　新仏教と本覚論はどこが違うか
第二章　偽書の時代としての中世
1　予言する聖徳太子
2　未来記の流行
3　中世日本紀の世界
4　神道説の形成と偽書
第三章　偽書はいかにして作られるか
1　異界からの言葉
2　夢見の作法
3　親鸞の夢
4　夢が告げる未来
第四章　中世的コスモロジーと偽書
1　中世コスモロジーの構造
2　起請文の神仏
3　偽書成立のメカニズム
4　中世人はなぜ偽書を書いたか
第五章　鎌倉新仏教の誕生
1　日蓮の彷徨
2　本仏との邂逅
3　新仏教の目指したもの
4　根元なる存在を求めて
第六章　偽書を超えて
1　偽書からみた中世
2　偽書の時代の終焉
3　偽書の精神と現代

序論冒頭で、鎌倉時代の安貞元年（一二二七）に発見された「聖徳太子の未来記」が承久の乱（一二二一）を予言したものとして『明月記』に記されていることを取り上げ、読者を「明々白々たる偽書が繰り返し出現しては人々の心を捉え」ていた中世の精神世界へと誘う。そして、「一つ一つの偽書をとりあげてその制作動機や背景を解明することではない」と断わった上で、「量」的レベルの検証ではなく、「偽書成立のメカニズムを、同時代の思潮とコスモロジーの中で詳細に検討することを通じて、「質」的レベルにおいて日本中世の偽書の独自性を明らかにしていく」という本書執筆の意図が述べられる。さらに、「〈偽書〉をキーワードとして、さまざまな思想的な営みの根元にある中世人の思考方法の特色を、その背景をなす彼らの世界観やコスモロジーをも視野に入れながら、明らかにしていく」という精神史の方法を打ち出している。つまり本書は、偽書を詳細に検討していく作業以上に、偽書を生み、受け入れていた中世人の精神に迫ることに力点が置かれているのであり、これにより従来個別に論じられてきた中世の文化・思想的現象について「統一的に把握するための新たな座標軸を提供」できるという。

第一章では、日蓮の遺文が大量に偽作されたことは、主観のおもむくままに文献を「捏造」する本覚思想の影響であるが、

当の日蓮も文献主義的に見えながら根本的には主観的であり、本覚思想に近似していたとする。また、法然や親鸞も自己の信念に基づくテキストの読み替えをしており、伝統に縛られない自由な（恣意的な）解釈を施す点で、新仏教と本覚思想が共通するとする。

第二章では、中世社会に偽書がすんなりと受け入れられていた実態を述べる。『太平記』に登場する「聖徳太子未来記」、『古今著聞集』などに収められる「智証大師御記文」、「聖武天皇勅書銅板」、『末法灯明記』など「未来記」という予言の書が一宗派に限らず中世に広く流布していた。また、日本で偽作されたにもかかわらず経典のごとく諸書に引用された「蓮華三昧経」とも呼ばれる「本覚讃」、中世における記紀神話の解釈と新たな神話の再創造によって生まれた中世日本紀や神道書が、いずれも「権威あるテキストに対し、原義にとらわれない自由な解釈を施す点」で共通していることを指摘し、法律や判例の偽作が頻繁に行なわれていた中世裁判の実態にも言及しながら、「このような著作群を生みだし、受け入れていった、中世という時代の精神的な土壌に照明を当てる」ことの重要性を指摘する。

第三章では、先ず『太平記』「雲景未来記の事」の話を分析して「未来記は人間の世界に与えられた異界からのメッセージだった」とし、「祟り」「託宣」「童謡」など多彩な方法を用いて異界が人間に向けて将来に関わるさまざまな情報を伝達しようとしたとする。『扶桑略記』所載の「道賢上人冥途記」も異界からのメッセージとして個人の未来を教示する「一種の未来記」と捉え、さらに『平家物語』『太平記』『更級日記』『かげろふ日記』『信貴山縁起』、そして親鸞の事例を取り上げて、中世では「夢」という回路を通じての神仏との交感が誰にでも可能で、「一人ひとりが未来記を書くことを認められていた」とする。ここに国家が神仏との交流権を独占していた古代と中世の根本的な違いがあり、そこで個人が得た神仏の啓示が社会に共有されるために、「もっとも信頼できる未来の予知者」として「聖徳太子をはじめとする一群の聖人たち」や社寺の神仏に仮託された偽書が生み出される。では、過去の聖人と仏像や神々までが同じレベルの「未来の予言者」とされるのはどうしてか。この疑問に応えるためには、中世の人々の世界認識（コスモロジー）と託宣が下されるメカニズムを解明し、その精神世界の内部に踏み入らなければならないという。

その解答が、第四章に示される。先ず、未来記の作者とされた聖徳太子・智証大師（・藤原鎌足像）が「応化」「権化」とされていることに注目し、中世思想を覆っていた本地垂迹説と重ね合わせて、不思議な能力を持った人物は仏菩薩（本地）が此土の人々を救うために姿を変えた存在（垂迹）であると分析し、未来を予言する聖人と仏像・神々が「彼岸世界の仏の権化」という点で共通することを力説する。この部分は、聖性を感じさせ怖畏の感情を呼び起こす宗教的存在がすべて本源の仏の垂迹

（生身）と信じられていたとする先著『アマテラスの変貌』での指摘と一致し、氏の独自な論が展開されているところである。この論は、『神皇正統記』などに見られる末法辺土観、起請文に勧請された神仏、御霊信仰などに言及しながら、さらに補強される。そして、「中世の人々のコスモロジー」として「人間を超えた神仏の世界」に彼岸世界の不可視的な本地（仏）と現実世界に可視的な姿で現われる垂迹（神・仏像・聖人）とが二元的に設定されており、これを前提として、衆生を彼岸に導こうとする垂迹による「救済のシステム」があり、それが未来記にも共通するとする。他方、自分たちにとって不都合な託宣・予言は、仏の垂迹（＝権化）でない「負」の存在（＝実類）が下したものと判断し、葬り去ろうとしていたという。本覚思想は根元の仏に由来するとの確信から生まれた思想でありながら、著名で優れた宗教者（先師）の著作として世に出た。その「真の理由」も、著者に仮託された先師たちが「彼岸の仏の使者だったから」という。そして偽書として大量に生成・流布した神道書は、「本源の至尊の意志に基づいているという強烈な信念」により「神への信仰を人々の間に広げていくための不可欠の手段」であったとする。本覚思想（仏）と神道説（神）は、「各人の内面が人間を超えるもっとも根元的な存在と直接につながっているという確信に基づき、個々人の主観と解釈を絶対視する思惟が貫かれている」点で共通するという。

第五章では、中世社会に偏在する〈偽書の精神〉が、鎌倉仏教にどのように貫かれているかを、日蓮・法然・親鸞の順に検討する。彼らの「超越的存在と直結しているという信念によって既存の常識を乗り越えようとする志向」は〈偽書の精神〉と共通するものの、「この世に姿を現わした垂迹を飛び越えて、じかに目に見えない本地の仏との回路を開こうとし」、「究極の救済を実現する上で、みずからが信ずる以外の、他の一切の神仏と教行の価値をはっきりと否定した点」に新仏教としての独自性があるとする。本覚思想や神道論との相違は、垂迹に仮託せず、「みずからを仏の真意の発見者」として自説を主張したことにあり、それ故、彼らは「真の宗教者」「真の思想家」となった、と新仏教出現の意義を高らかに謳いあげる。

第六章では、〈偽書の精神〉が高揚していた日本の中世を宗教の時代として思想史上に位置づける。江戸時代に実証性と合理性を追求する学問が発達し、社会が世俗化したことで、「彼岸や冥界のリアリティを前提とする偽書の時代と、それを支える〈偽書の精神〉の終焉」をもたらした。近代的思考から見ても、「超越者の名のもとに、みずからの恣意や主観のおもむくままに自由に思考を組み上げていく中世的な〈偽書の精神〉」は縁遠いが、それを再評価し、私たち自身の思想と生き方を問い直さなければならないという。

三　本書の価値と問題点

本書は、「偽書」というある意味で素性の知れない扱いにく

い資料を中核に据え、庶民信仰から本覚思想、鎌倉新仏教に至るまでを論じ、そこから中世全般の精神世界を描き出している。従来の思想史研究は、著名な思想家とその著述を分析することに力点が置かれ、それらをモザイクのように張り合わせることによって通史が書かれていた。それに対して、より底流に存する思想＝精神を読み取ろうとする氏の業績は、高く評価されなければならない。「信仰」という視点から時代思潮・時代精神を読み取ろうとしている筆者にとっても、大きな刺激になった。

偽書についての研究は、近年、思想史のみならず国文学の分野でも盛んで、各種の学会でシンポジウムが行なわれたり、雑誌に特集が組まれたりしている。氏はそれらにも参加しながら多くの業績を吸収し、本書を執筆した。しかし、本書において「偽書」はキーワードであっても、探求の対象とはなっていない。自らの興味に従って個々の事例を探求することを拒み、中世の精神世界を「統一的な視点から相対的に把握」することにこだわる（序章）。この壮大なテーマをわずか二〇〇頁の選書の中にまとめられた氏の苦労は大変なものであったと想像される。そして本書の中で、中世における偽書の重要性を指摘し、異界との交流の実態を紹介したことは、一般読者の関心を高めることに成功したと思われる。

しかし、中世思想史の研究に役立てるためには、検討すべき内容がある。

中世は他の時代と比較して宗教的な価値観が優先され、人々が神仏の存在や言葉を注視していたということは、誰もが認めるであろう。その中世の精神世界を偽書が次々と作られ受容されていた実態と重ね合わせているところに、本書の価値がある。ただ、庶民一人ひとりが異界との交流回路を有していたとし、「古代的な一元的世界観」に対する「他界―此土の二重性を持つ中世的世界観」（第五章）という説明に発展させることは、いかがであろうか。確かに平安中期以降、浄土教の発展や本地垂迹説の広まりによって、古代的な来世観が大幅に変更し、仏教的来世観による思想・言説が横行した。また、夢や託宣による神仏の啓示が重視されていたことも諸先学が指摘するとおりである。けれども、それら「異界との交流」が特別な時空間でなされる点に変化はなく、誰もがなし得ないからこそ、宗教家の役割が増大し、霊験譚がもてはやされたのではないだろうか。とすれば、偽書についても、誰もが作れたわけではなく、一部の宗教家が自己の主張を展開するために作成し、それを流布させるために過去の宗教的な偉人に仮託した、と考える方が穏当であろう。

また、超越的な「聖的世界」の分析により中世の宗教思想を論じる手法についても、疑問が残った。第一章で本覚思想と新仏教の共通の思考方法として「古典的なテキストに対し伝統に縛られない自由な（恣意的な）解釈を施す点」があることを挙げ、続く諸章でその背景に〈偽書の精神〉があることを探り、第五章で両者の相違を指摘する。そして、垂迹を介する本覚思

想・神道論に対し、新仏教は本源の仏の存在のみを認め、それ故に意義があると結論づける。中世的な本地垂迹説に則った分析ではあるが、そこに論理的な飛躍を感じるのは評者だけであろうか。他方、偽書の作者として仮託されるのは垂迹の祖師（本地を持つ）であるとするが、偽書が登場してくる院政期に『仏説延命地蔵菩薩経』『大梵如意兜跋蔵王呪経』などの偽経が日本でも撰述され、それらは「仏説」として釈迦そのものに仮託されている（服部法照「日本撰述偽経について」『仏教文化学会紀要』一、一九九二年など参照）。また、『預修十王生七経』や『発心因縁十王経』など『地蔵十王経』の系譜に連なる日本撰述偽経は、地獄絵・六道絵のモチーフともされ、中世社会に浸透した。偽経も偽書の一種と見るならば、本地の仏と直接に回路を開こうとしたのは新仏教に限られない。法然・親鸞・日蓮のみを分析の対象とし、それらを新仏教の代表として高く顕彰する氏の姿勢は、ともすれば本来の目的を離れ、中世の文化・思想的現象を統一的に把握する座標軸を歪めることになる。本地と垂迹、権化と実類という尊格の違いは、確かに中世の文献に現われることではある。しかし、本覚思想や神道思想は垂迹で新仏教は本地とする見方は、評者には理解しがたく、ある意味で旧仏教（顕密仏教）と新仏教の対比という旧来の図式を改変したに過ぎないと感じられた。

中世思想史研究の魅力を読者に伝えたいという氏の熱意が、新仏教の意義を論じさせたと考えられるが、それを性急に結論づけようとするあまり、資料や視点に偏りが生じたのではないだろうか。

四　偽書研究の課題

読後の感想としては、偽書という中世思想史研究を進める上で避けては通れない材料を前面に押し出すのであれば、従来の研究成果に自身の発想を加えるだけでなく、より慎重で実証的な考察がほしかった。これは氏のみの責任というより、中世思想史研究の現状に問題があり、学界全体として偽書研究の可能性と方法を模索しようという姿勢に欠けている点に最大の責任があると思われる。そこで蛇足ながら、今後なされるべき偽書研究を視野に入れながら、評者の意見を二点ばかり指摘させて頂きたい。

第一に、偽書を研究する上での時代区分をしっかりすることである。評者はかつて「日本宗教史上における院政期の位置」（『宗教研究』三〇九、一九九六年、後『平安時代の信仰と宗教儀礼』続群書類従完成会、二〇〇〇年に収録）で、偽書や日本撰述偽経は院政期という「宗教家が自立」する転換期に生まれ、精神史的には鎌倉新仏教や神道論の発生などと同次元の現象であると指摘したことがある。本書でも偽書が古代から中世への転換期に生ずることが述べられているが、「院政期・鎌倉期・室町期」を中世として一括りにし、その現象を総括的に論じる方法には問題がある。例えば、同じ聖徳太子の未来記であっても、最初

に登場した摂関末・院政期の衝撃と、それが先例あることとして取り上げられた鎌倉期以降（『明月記』『太平記』など）では、社会的な意味が根本的に違う。本覚思想についても鎌倉初期の証真によって批判が加えられる以前と以後とでは文献の性格が異なるし、日蓮に仮託された遺文は更に異質である。偽書の生成と広範な受容が中世の精神を解明する重要な鍵となることが明らかにされた上は、偽書が中世社会でいかに展開するのかという歴史的段階を解明しなければならない。

第二に、偽書そのものの定義と分類である。本書では、未来記から記述をはじめ、それに類する予言の類、さらに中世日本紀や神道論までをも含めて考察の対象とし、〈偽書の精神〉を描き出している。偽書は中世人の思考方法を探るための入口に過ぎない、といえばそれまでであるが、偽書そのものに性格の違いが認められることを無視して今後の研究は進展しないであろう。例えば、同じく過去の偉人に仮託される書であっても、単なる権威づけのために後から「〇〇撰」とされたもの（狭義の仮託書）と、執筆当初から「〇〇」に成り代わって自説を開陳しようとしたもの（狭義の偽書）とがあり、両者を同列に論じるわけにはいかない。本書で扱われた聖徳太子の「未来記」や『四天王寺御手印縁起』などは後者に属するが、『元興寺縁起』や『先代旧事本紀』などは前者に属する。また、中世の代表的な両部神道書である『麗気記』も前者に類別されるもので、それ故に近世の版本で空海撰とされる以前は、醍醐天皇伝撰、空海撰、聖徳太子撰、役行者・空海・最澄・醍醐天皇共編など様々な説が錯綜していた（原克昭「麗気記」解題『仁和寺資料【神道篇】神道灌頂印信』名古屋大学比較人文学研究室年報第二集、二〇〇〇年所収、大正大学綜合佛教研究所神仏習合研究会編『麗気記I』法蔵館、二〇〇一年など）。

さらに、「蓮華三昧経」の偈文（本覚讃）や比叡山の「三聖二師二十巻」のような実在しない書の一部が次々と転記される場合（門屋温「三聖二師二十巻をめぐって――山王神道における偽書の位相」『仏教文学』二〇、一九九六年など）、もとは注記に過ぎなかった文章が書写過程で本文化されて偽書の一文と見なされる場合（拙稿「『麗気記』の構成と言説」『日本学研究』四、二〇〇一年など）があり、明確な思想的方向性を有さずに生まれた偽書もあったと考えられる。本書における偽書の定義は曖昧で、予言的な言説すべてを含めて〈偽書の精神〉を論じ、それらに垂迹による「救済のシステム」があったという。しかし、明晰な論理的説明の影に覆われた真実はないだろうか。

本書でも取り上げられた神道書について見てみよう。江戸時代以来、神道の代表的な偽書とされてきた『神道五部書』は、もとから偽書として作成されたものではなく、伊勢神宮において神職が職務を遂行する上で必要な典拠を集めたものであるとする見解が出されている（鎌田純一『中世伊勢神道の研究』続群書類従完成会、一九九八年、拙稿「中世前期における神道論の形成――神道文献の構成と言説」『文化史の諸相』吉川弘文館、二〇〇三

年所収など）。それと、吉田兼倶（一四三五～一五一一）が神道界の統一を図ろうという明確な目的によって遠祖卜部兼延に仮託して作った『唯一神道名法要集』とは、社会的・思想的な意味合いが全く異なる。このような知見に立った場合、すべての神道書を垂迹による「救済のシステム」の一環として位置づけることはできないであろう。

偽書を一括して論じるだけの共通認識ができていない現段階では、偽書研究に必要な時代区分と分類が先ずなされるべきである。また、偽書そのものの研究を発展させるためにも、性急な理論化には慎重であるべきで、個々の事例に隠された真実を追究する地道な努力を惜しんではいけないであろう。氏もこのことを十分理解しておられると思うが、さらに偽書の研究に取り組まれ、より精密な「偽書の精神史」を書いて頂くことを願っている。

五　おわりに

本書は〈偽書の精神〉という難題に取り組んだ画期的な書であり、その意義は聊かも減じない。しかし、研究者の発想に過剰に委ねられた精神史の記述は、かえって思想史研究の発展を妨げるのではないか、という危惧が残った。思想史であるから書誌的な個別研究をしなくても良いということはない。もちろん、個々の事例を研究者の興味に従って掘り進めるだけでは不十分である。個別実証的な研究を進めながら、通時代的な思想の変遷を解明するという困難な事業に向かわなければならない。その中で、本書が指摘しているように中世における偽書の占める位置は極めて重要で、その本格的な研究が待たれるのである。しかし、偽書をも視野に入れた時代思潮の研究はその端緒に着いたばかりであり、今後、紆余曲折を経て、方法論についても様々な議論を重ねながら発展させられなければならないだろう。本書、ならびにこの拙評が、僅かでも諸氏の関心を高め、精神史研究に学界全体として取り組む環境作りに役立つことを願い、擱筆することにしたい。

（大正大学非常勤講師）